

和束町の歴史と文化遺産

向井 佑介

平成 25 年度から平成 26 年度にかけて、地域貢献型特別研究費（ACTR）の事業として「和束町の歴史と文化遺産」（代表：上田純一・向井佑介）の調査と研究を実施した。

現在、和束町には、京都府が検討している「宇治茶」を中心とした世界文化遺産の重要な構成要素となりうる茶畠景観や宗教遺産などがありながら、それらの歴史的評価についての調査体制が整っていないことが大きな課題となっていた。本研究は、地域の古文書、寺社とその石造物、歴史と景観などに対する総合的な調査をおこない、それらの現状を記録、公開することで、地域の文化振興とまちづくりに貢献しようとするものである。

研究体制は、歴史学科の専任・特任教員と京都府農林水産技術センター生物資源研究センター長の藤井孝夫が研究分担者となり、これに相楽東部広域連合生涯学習課の中嶋孝浩、和束町農村振興課の伊吹学と久保寿己が研究協力者として加わっている。

1. 古文書の調査と研究

平成 25 年 8 月 1 日に、和束町の湯船財産区をおとずれて財産区が保有する文書類を実見し、研究分担者の小林啓治と東昇を中心に、目録の作成を進めた。さらに、一部の文書と絵図類を府大に持ち帰り、文字の翻刻を含む調査と研究をおこなった。



湯船財産区における古文書と絵図の調査
(平成 25 年 8 月 1 日)

湯船財産区での文書調査とあわせて、湯船の小字中山に所在する大智寺をおとずれた。大智寺が所有する文書類については、京都府立山城郷土資料館に寄託されていたものを府大に借りだし、研究代表者の上田純一を中心に目録作成をおこない、内容の検討を進めた。

また、次項に述べる寺社と石造物の調査と関連して、鷺峰山金胎寺に関する文献史料を研究分担者の横内裕人らが中心となって集成検討した。

2. 寺社と石造物の調査

湯船地区において文書調査をおこなった平成25年8月1日、白栖の正安2年（1300）弥勒磨崖仏と撰原の文永4年（1267）地蔵石仏の予備調査を実施した。ついで10月27日に、鷲峰山の史跡金胎寺をおとすれ、多宝塔などの主要建物と山頂の正安2年（1300）宝篋印塔の現状を確認した。また、同時期につくられた湯船五ノ瀬の熊野神社跡に残存する弘安10年（1287）と正応4年（1291）の宝篋印塔についても簡単な調査をおこなった。

これらの予備調査をふまえて、平成26年2月から3月に、金胎寺境内の地形測量と石造物の三次元写真測量をおこなった。まず、2月21日に株式会社相互技研の協力をえて、白栖地区的弥勒磨崖仏の三次元写真測量を実施した。さらに、3月3日から7日には金胎寺宝篋印塔の三次元写真測量をおこなうとともに、考古学研究室の大学院生・学部生を中心にトータルステーションと平板を用いて境内の地形測量を実施した。4月16日には補足調査として、基準杭のGPS測量を実施した。

金胎寺の測量期間中、天候不良のため作業ができなかった3月5日には、園地区にある和束天満宮の石造物を調査した。元禄7年（1694）、正徳2年（1712）など、近世でも比較的ふるい紀年をもつ石燈籠を重点的に測量した。また、10月19日には、和束天満宮の石燈籠の補足調査をおこない、智積院第29世の化主であった觀豪僧正が文化9年（1812）に寄進した石燈籠などを実測した。同日、湯船五ノ瀬にある白山神社の石造物をあわせて調査した。本殿前にある天保10年（1831）石燈籠と入口にある文久3年（1863）石燈籠を実測し、境内に分布する石造物の分布図作成と銘文の釈読をおこなった。

3. 歴史と景観の調査

和束地域の文化を歴史的に明らかにするため、さまざまな分野と時代を専門とする研究分担者らが、多面的な検討をおこなっている。まず、和束地域の古墳について、菱田哲郎が分布と現状を考察している。また、奈良時代に恭仁京と紫香楽宮をむすぶ街道として文献にあらわれる恭仁京東北道の歴史的意義について、櫛木謙周が検討し、論考を作成した。また、和束における茶業の歴史について、藤井孝夫が史資料を集成し、報告している。さらに、上杉和央を中心とする歴史地理班が、和束地区と湯船地区の双方において聞きとり調査を実施し、その成果の一部はすでに報告書として公表されている。⁽¹⁾

以上の調査成果については、2015年3月に京都府立大学文化遺産叢書第9集として公刊する予定であり、詳細はその報告を参照いただきたい。⁽²⁾

【註】

- (1) 上杉和央編『和束町湯船地区 調査報告書』、2014年
- (2) 上田純一・向井佑介編『和束地域の歴史と文化遺産』京都府立大学文化遺産叢書第9集、2015年